青春ポナペ紀行

平野高壱著

ノンフィクション冒険時代

こんなに科学が進んでいない昔
僕は青春をかけて日本を飛び出
した。〔ナンマトルの財宝を求めて！〕
そこには２００％の僕があった。

感動をお約束します？　ぜひご覧下さい。

序章　　初めに

　僕がそもそも、グアム島経由でポナペ島へ行こうと決心したのは、時、１９６７年の２月初めでした。そして実行は５ヶ月後の蒸し暑い７月になっていました。
　資金は１７歳頃から始めた株を売り払い、その他銀行預金等、合計して２５万円程度あって、この日本に嫌気がさしてきていたためと、書店で偶然に、手に入れた本から、ポナペの財宝を知ったことで、これ幸いと飛びついた次第なのです。

　笑わないで下さい。まだ１９歳と若輩ですが、僕はあくまでも真剣でした。その財宝で、ヨットを買うつもりでした。
　その現在のお金にしても、ヨットを買うつもりで貯めてきたのです。そのお金をそっくり使うというのですから、僕の真剣さも分かってもらえるのではないでしょうか。
　準備には約一ヶ月かかりました。広告会社も半月ほど、たいした理由も言わずに休んでしまいました。それは決して、すんなり認められたものではありませんでしたが、何しろ必要な時間でした。

　ポナペ島という島は独立国ではなくて、アメリカの信託統治領で、入るのが少々、ややこしいため、その許可を得るのにほとんどの日数が費やされたのです。小さな紙のカードでしたが、実際には向こうに行ってからでも、すぐ取れたらしいのですが、日本で済ませておいて悪いことはありませんでした。

　これは僕の肉親やごく親しい友人以外、誰にも内緒で事を運びました。もちろん、手続きを頼んだ旅行会社の担当者にも、本当のことは言いませんでした。ポナペ島ではなく、名の知れたサイパン島に行くとして申請したのです。
　サイパン島など、行くつもりは毛頭なくて、また日本に帰るつもりもなかったのですが、向こうへ行ってみて、日本という国が一番いい国だといういうことを改めて認識されられたのです。習慣も、そしてもちろん、女の人の美しさを！

　ではここに、僕のポナペ紀行をお届けします。これを読まれる方々、全てに感動してもらおうとは思っておりませんが、いろいろな面で参考になれば、こんなに嬉しいことはありません。

　では最初に、この紀行を読む上で、大切でありかつ、必要な人物をほんの一部だけ、紹介致します。

グアム島

- 有井フレッド氏

　彼は首都アガナのデパート、タウンハウスの隣の食堂の”バービー．キュー．イン”の経営者で、

また、建築家をやっている日本人ハーフの３世、日本人の奥さんと暮らしている。グアムに来て初めて、飛び込んだ店がここでした。そして、また彼は僕のスポンサーになってあげるから、グアム大学へ通ったらどうかとも言ってくれました。とても親切で日本語がうまい人です。

● 福田ハーバート氏

彼は首都アガナの、釣具雑貨店経営兼、漁師さんで、グアムの入国管理官や政府の要人とは全て、知人関係をもっている人で、我々日本人には希有な存在です。日本語は少々たどたどしい。滞在期間の延長や、その他の手続きはすべて、彼の手にかかったらたちまち解決してしまいます。彼には２人の子供がおり、僕の良き英語の先生でした。家はトヨタモーターの会社のすぐそばにあり、グアム滞在中は最高に世話になった人です。

● マイク

日本のいすゞの、ベレット1600GTスポーツカーを持っている。日本人に少し似た親切な男の人で、福田さんの家まで愛車で送ってくれた。一回しか会わなかったけれど、日本語にとても興味を持ち、僕も面白いので少し教えてあげた。

● フィル

純粋な、格好いいアメリカ人、１６歳、ボロボロな大きな愛車で、我々を様々な所へ連れていってくれた。海軍の潜水艦乗務員の息子。高橋君と別れの夜、僕は初めて彼ら外人と共にボーリングをやった。

● アルバイトの姉妹

バービー．キュー．インでアルバイトをしていた日本人姉妹、少し色濃い、妹のヨシコさんはポリネシア風の顔立ちのまじめな１７歳。お姉さんの方はハーフとは思えないほど、二人とも日本で生まれ、日本で育ち、数年前、このグアムに移住してきたというチャモロ系のハーフブラッド、日本語、英語、ともに癖がない。そして彼女らのお父さん。皆でボーリングをやった。

ポナペ島

● ロベルト中村君

彼こそが、この旅で僕の最大の恩人であった。ポナペ島を三分の一周、徒歩で歩くのをサポートしてくれ、島の各村のナンマルキ（村長）に紹介してくれて、その家に泊まる世話をしてくれた。僕と同い年で彼とは兄弟（ブラザー）の間柄となった。

● ミスター金氏

彼はポナペで、歯医者さんを開業している日本語のうまい韓国人のおじさんで、とても忙しそうでしたが、着いた時、ホテルに何故か、飛んできてくれました。握手をすると、ものすごく強く握る人で、すぐ打ち解けられポナペに行く日本人には良き相談相手になってくれるはずです。

● 田上礼次郎氏（リー．メンディオラ．タガミ）

彼はポナペ島唯一のホテル．カセレリアインの支配人、おっかなそうだけど、とても良き相談相手で、両親は日本人なのだがここに住んでいる。日本語、英語、ポナペ語が使え、必要があれば適切な人を紹介してくれます。

●　井川利美氏

　彼は二世でハワイ銀行ポナペ支店長、初め、とっつきにくそうだが、それは日本語がよくしゃべれないためで、一時間も話をしていると、とても気さくでいい人だった。自分の家の物で必要な物があれば気よく貸してあげるという。七日には夕食に招かれ、いろいろご馳走になり、ポナペの風習など聞かせてもらった。その奥さんは、また優しくお茶目でいい人で、日本語は当然うまい純粋な日本人です。

トラック島

●　ジム．ハーマン氏

　彼とはグアム島で知り合った、２４歳のアメリカ青年、非常に立派な人格者で、僕の変な英語でも敏感に理解してくれて、向こうから席を立つようなことのない人。トラック諸島のルア島の平和部隊（ピースコープボランティア）の一員で、先生として現地の人に勉強を教えている。約一年後には、アメリカのアリゾナ州、ツーソン市に帰り、きれいなお嬢さんと結婚する予定（写真を見せてくれた）。彼には弟と妹が一人ずついる。

●　森さん

　トラック島でお世話になった日本人で、政府要人として勤務していて、随分世話を焼かせてしまいました。日本の書籍を、とても欲しがっていました。

第一章　　飛行機

　７月２８日、午後１０時４５分、羽田を発つ。パンアメリカン航空の４発ジェット機。もちろん初めてである。空を飛ぶ。神に対しての侮辱ではないだろうか！本当にそう思うのだった。

　ともはや、石油くさいにおいを残して、ゆっくりと滑走開始停止線まで進む。
　およそ５分後、エンジン回転が急に上がる。猛烈に身体に伝わってくる。車輪にはブレーキがかかったままだ。
　と、突然、ブレーキが解き放たれた。機体は、バットで打たれたボールのように飛び出す。
　身体がマットに押しつけられる。ますます押しつけられる。機体は急激に上昇を始めた。
　１分、２分、３分．．．、まもなく水平飛行に入る。シートベルトは解き離される。次いで、ライフジャケットのつけ方の説明、美しいスチュワーデスだが、顔は引き締まっている。こんなに女の人が偉大に見えたことはない。
　夜中の12時なのに、皆起きている。国際線ともなるとアナウンスは英語で、チンプンカンプンだ。途中、悪気流のためか「ベルト締め」とのアナウンスがあったようだが、皆がざわめくのを見て判断したのだった。
　スーッと下に落ちたり、小刻みな振動、たまに大きい一揺れ、ほどなくして無事に治まり、待ち構えていたように、軽めの食事のトレーが配られる。サンドイッチとコーヒーだ。いやー、美味しい！、しかし、少しもの足りない。

　日本人の顔もちらほら見えるが、話す気にはなれない。僕はかつて、船に相当乗って慣れていたので、飛行機酔いはしなかった。船とそっくりの揺れだったのだ。

　グアム島時間、深夜２時４５分にアガナ空港に気が抜けたように、あっと思う間に着いてしまった。（時差１時間で正味３時間）
　空港に降り立つと、足の下の芝生の上からムッとした熱気が襲いかかる。飛行中の高空冷気からの移り変わりは、やはり異国に来てしまったのだというやばさ、孤独との戦いがついに始まるという沸き立つ思いともつかない感動が心を覆った。
　流れるまま人びとについて行き、検疫、入国手続き、そして税関。別に言葉も充分に話せないとみたのか、中も見ないで行っても良いには、なめられたというか拍子抜けしたのだ。

　トップダッシュで空港の外に飛び出すと、深夜なのに、警官や人の群れがワンサといて、ちょっとたじろいだのだが、すぐ、一人で悠々と、『僕は日本人だ、負けるものか』と、勝手に何か訳の分からない事を心に念じながら突き進み、タクシーでも拾おうかと思う間もなく、一人の、日本でいう“ぽん引き”みたいな若い男が、「どこで泊まるのか」と、聞く。
　日本の週刊誌で知った、一番安いホテルの名前を挙げる。「マイクロネシアンホテル」！！
　すると、あそこのクルマにというので、濃いグリーン色のマイクロバスに乗り込んでしばらくたつと、一人の日本人がやって来た。

佐藤さんである。これからしばらく先の旅の間、成り行き同行してくれたのだが、彼のおかげで随分、言葉の心配をしなくてすんだのだ。
話を少しするうちに、すぐホテルに着いた。彼と同室にする話しをホテルから勧められ、ツインがとれて、一人５ドルで予定より安いことが人の縁として二重に嬉しかった。

翌朝、１０時に、２人でホテルから見物に出かける。幾人かの現地の親日家と知り合い、おおいにこの旅行中の面倒をみてもらった福田さん、有井さん、アメリカ人、日本人の人達、また僕の留学の話が出て、少々、ポナペに行くのが延びてしまったが、その８日間というもの本当に、とてもわくわくして過ごせたのである。
車で島を廻り、アメリカ人のおっさんと、ポラリス原子力潜水艦の中を隅々まで見学したり、ボーリングを生まれて初めてやったり、日本人の旅行会社の２人の女の人達や、調理師の学校の学生で、１人でグアムに来たという海老原君たちと知り合って、おおいに、話の花を咲かせたりで、８月５日の朝、ポナペに発つ時は、ずいぶん心配をして見送ってくれた人達がいたのである。飛行場は社交場であるかのようだ。
そのポナペ行きの便にも、すれすれで乗ったのである。スタンバイのキャンセル待ちで、福田さんの顔で優先的に乗れたのだ。感謝し切れないと思うのだった。他人に対してこんなに親切にしてくれるものなのか？

それは、ダグラスＤＣ－４という機体で、その昔は華やかに世界中を飛び回っていたものであり、今ではジェットの波に押され、ひっそりローカル線で働いている奴である。まだ機内には少し空きがあった。やはり、ジェット機と違い、穏やかに飛ぶ。窓から見る景色ものんびりとしていて、ゆっくりと後ろに下がって、すぐに青い海が眼下に広がってくるのだった。

トラック諸島に近づく頃、世にも美しい島影が、海の上に落ちているように見えた。しばらくのあいだ、ぼーっと見とれざるを得なかった。
アガナから４時間後、大珊瑚礁の中の島に向けて、高度を下げ滑空、車輪がドシンと接地、低い大地に降り立った。飛行中はベルトなしでもいいのだが、万一の事もあるので、締めるのだろう。石につまずいたり、穴に落ちたりした時は大変だし！そんな事を思わせる未舗装滑走路の、凸凹着陸だった。

ここで、次の飛行機に乗り換えるわけだが、目の前にあるのが小さな水上機、初めて見る代物である。胴体が太くて短く、波打ち腹、羽が上に付いていて下部にフロートが付き、すぐ下に車輪が覗いている。不格好だが、魅力のある飛行艇だ。これに乗れるかと思うと、胸がわくわくしてきた。およそ２０分ほどで荷物の積み替えが終わり、すぐさま乗り込んだ。

操縦席も丸見えの、やっと１５人程度乗れるアットホーム的機内には、網でしっかり固定され

た混ぜ混ぜの貨物類も同席で、パッセンジャールームの後ろ側脇隅に一緒にのっかっている。水上機だが、車輪も付いていて、滑走路を使って陸上から離陸する。
　ゆっくり走り出し、停止線につく。プロペラの回転が上がる。ブレーキはかかったまま、と、離れた。
　恐ろしいスピードと振動と共に大地を走る。まだ上がらない。スピードは時速１５０キロメートル程にまで上がっていると思う。胴体が重いせいか、やっとの思いで浮き上がれたという感じだ。

　その音のうるさいこと、鼓膜が大声で喋っている感じだ。人間の会話など、口を耳元に付けなければ解からないほどだ。でも、窓際だったので思い切り下界を眺める事が出来た。
　ファンタスティック！青い波が無数に果てしなくざわめいている。雲がすぐ横で後ろに去っていく。水平線は雲でラッシュアワーだ。空は地平線まで明るく、快調に少しの振動だけで、凪の海を走る客船のように、気流にもまれることもなく淡々と飛び続ける。

　アメリカ人の女の子が、前の席から身体を乗り出して、話しかけてきた。１１歳の、目が青く透き通っていて、そばかす顔で、ちぢれた金髪の可愛い子だ。アメリカ漫画のベティちゃんタイプで、つばきを飛ばしながらしゃべってくる。全く気にならない。人なつっこくて愛らしい。日本人にはない行動だ。でも顔をグーっと近づけてくるので、何か気恥ずかしいのだ。『いや、僕は日本男児だ、強いはずだ、世界の人の注目の的なんだ』と、女の子に負けじと、心に言い聞かせる。

　その子の親たちもいるのだが、何も言わない。気を遣わなくて結構なことです。お互いに！
　日本の１０円玉をあげたら、絵葉書をどっさりとくれた。その子が、ベルト締めろと言う。別に（ベルト締め）のサインは出ていない。すると、島が見える。山のように大きい！！ポナペ島だ。
　緊張して、早過ぎるがベルトを腰に回す。トラック島から３時間。やがて機は旋回を始める。1回、２回、景色がパノラマのように窓を動き、海面が横に並ぶ。遠心力で不自然さは感じられない。ねらいを定めて滑空、５秒、６秒．．．１０秒、そして海面が迫る。１メートル、５０センチ．．．．．シューッと、水を切って、軽い抵抗だ。実にやわらかい感じで着水した、ほとんどショックはない。
　惰性で、機首をある方向に向け、プロペラを軽く回しながら、海中に勾配をかけた突堤コンクリート誘導道に向かう。水中から脚が現れる。プロペラを強く回し、グーッと登り切り、せまい平面で転回して頭を海に向けて止まった。そこは海の中の小さな森の台地を切り開いた所。

　どんよりした灰色の空、、上空からはそぼふるぬるい雨、、雨帽子をかぶった人、南洋の感じがしない。椰子の木やバナナはなっているが、雨に煙って気分は立っているのも空虚だ。平服の現地の人から、チャチャチャと、パスポートに何やら書いて貰い、古い米軍の上陸用舟艇らしきものに乗り、兵隊さんのように運ばれて、ポナペの首都、コロニアにやっと上陸した。そしてせ

かされるまま島唯一の、ホテルカセレリアインへ、二人の日本人と共に！

　生まれて初めての海外旅行へ、それもへんぴな所へ、そしてジェット機、プロペラ機のＤＣ－４、それに期待の水上機と乗ってしまった。おおよそ運が良かったのだろうか、押し寄せる運命なのか？、しかし、僕の真の目的はまだ誰も知らない！

第二章　　ポナペ島第一印象

　８月５日、早朝、福田さんや宇田川さんたちに見送られて、グアム島をあとにして、トラック島で水上飛行機に乗り換え、約７時間後、ポナペの旧日本軍の残した水上機用滑走路に、上陸した。
　大きく残骸をさらしている元日本軍の航空機格納庫が、鉄骨がひしゃげている構造で、まるで廃工場のように見えた。

　そこは本島とは離れていて、その待合所といえる小屋で、なぜか現地の人達と会ったが、日本語をよく話す。どうも、我々日本人が来る事を知っていたようである。

　一向に、入国手続きがないのであるが、気にも止めないでいると、「月曜日・・・・」と、いう声。のんびりしていること！（実際はさっきの人のサインで済んでいた）月曜日とは何なんだろう？
　夕方、機上から宿泊ホテルまで同行の二人の日本人、東京都立大学人類学研究室の、牛島さんと青柳さんと知り合い、そのご厚意に甘えて、彼らの知人宅へ３人で呼ばれた。

　井川さんといい、ハワイ銀行のポナペ島支店長で、日本語は流暢には話せないが、とても親切な人であった。二人の子供がおり、上は１４歳の女の子で、とても可愛い。でも、日本語はしゃべれないけれど、聞けるというから、うかつに物が言えない。それと日本語で聞くと、英語で答えるというチグハグでやり切れない！

　この日、この井川氏宅には、４人の来訪者が他にもあり、その夜、遅くまで、ポーカーを楽しんだようである。

　翌８月６日、我々日本人は目的が全く違うせいもあり、今日は別々に行動する。元はと言えばそれが当然なのだが、異国に来ると、妙に同胞が恋しくなるものである。

　朝食は７時頃であったので、逃してしまったというより、実はその覚え書きが英語で、面倒くさくて読もうとしなかったのが悪かったのであるが！

　夕食時、ホテルに帰るまで腹が空いて決してオーバーではないが、ぶっ倒れそうであった。僕は明日のため下見で、ある程度、島の奥に分け入ったのだが、途中、美味しそうな木の実が、たくさん木に実っていたけれども、背が届くまでもないほどに高く、そこいらの、歩いている豚でも、ヤギでも、イナゴでもトカゲでも何でも食べたい心境にかられた。

　下見中は人に話しかけたというより、話しかけられたと言ったほうがいい。待ってましたとばかりに話しかけてくる。

日本時代は本当に良かったと、心から思っているようだ。少なくとも、全ての年寄りはそう言えそうだ。

その例として、昔はお金がたくさん日本人の手から落ちたそうである。しかし今は、昔と比べて驚くばかりにさびれているそうだ。アメリカの肩を持つ、今の昔を知らない若い者が恨めしいという。

島唯一の、お金になる産物、椰子の実から取れるコプラも、日本時代は今の２倍の値段で買ってくれたそうで、山には腐るほどあるけれど、お金にはならずと恨めしそうだった。一つ、がっかりしたのは、その人と別れたあとで、追っかけてきて、「タバコないよ」と、言われた時にはビックリした。やはり島の人は？いや、素直なんだ！

それはさておき、ここのホテルの食事は大変良い。まず、３枚のトーストパンとバター、ジャム類、漬け物がでる。２枚ほどバター等をつけて食べていると、うどん入りスープが出てくる。次に、肉や野菜、米飯が出てくる。そしてデザートの果物のパパイヤ、マンゴー、コーヒーと、フルコースだった。空腹も手伝って、あっという間に食べてしまった。と言うより、平らげてしまった、のほうが合っていた。食い物がいいとその土地が好きになるように、僕はここが気に入ってきた。悪い人などいない気がする。

第三章　　ナンマトルについて思うこと

　ナンマトル遺跡はやはり存在していた。日本で知った、恐ろしいところではなく、良い所であるという。石で造った遺跡が確かにあるそうだ。こんなに人に知られていれば、おそらく財宝は見つけられないかもしれない。
　だが、できるだけの推理と想像力を働かせ努力してみたい。

　見つかったあとは速やかにコロニアの町に戻り、帰国準備にはげみ、あとは近くの無人島で、黒サンゴ、赤サンゴの収穫を得たいが、目の前全てが、異郷で取っつきにくいのは明らかであった。
　しかし、宝物など夢の類かも知れないことはもう、うっすらと感じている。けれども僕の冒険心を動かす何かが僕の身体の中で叫んでいるのはどうにも押さえきれない。

第四章　　ナンマトル遺跡

　ついに、ナンマトルに着いた。これから何をしよう？
　まず食べることだ。同行のロベルトが、スルスルと２０メートルはあると思われるヤシの木に登り、椰子の実を１０個ほど落としてくれた。先っちょをナタで切り落として、中の樹液を飲んだ！飲んだ、ガブガブ飲んだ。５、６個残して、野営地のナンマトルを見て回る。

　うわさの穴は？墓穴である。一番、東寄りの島へと上陸した我々２人は５つほどの穴を見つけた。そして、もぐってみたところが何のことはない。全てが、ただの凹地に、石がかぶさっているにすぎないようだ。最近、動かした形跡もなく、動きそうなラッキーな石もない。

　その中で、一つだけ、垂直に人間がやっと通れる位の穴で、さらに横に延びていると思われる穴に入ったが、やはり３メートル位で行き止まった。なーんだ！と、持ってきた棒を石の隙間から差し込んでみると、その棒は１メートル位あったが、何の抵抗もなく入るではないか！

　石が塞いでいるだけで、奥に入れるのではないかと、動かそうと試みたが、一人の手ではどうにもならず、しかたなく潔く諦めざるを得なかった。

　だが、ほぼ財宝がまだあるというのは間違いであろう。たとえあったとしても、今は昔の物語だろう。午後１時、同行のロベルトを帰らす。
　土産にナイフとコンパスをやる。彼は喜んで日本からの僕の手紙を待つべく、元来た道を、水の中を歩いて去っていった。、彼を後ろから見ると、あてどなくと思われるような背をして帰っていった。
　何しろ、また歩いて今まで来た道を彼は帰らねばならないからだ！

　夕刻、このナンマトルのパンの実を、棒でたたき落とし、、また対岸の島から青いバナナを取ってきて、火で焼いたが食えたものではない。とうとう朝食だけで終わってしまい、もう飢えに瀕した。
　どんなものでも食べられるような錯覚に陥る。子魚、葉っぱ、草、トカゲ、雨、紙と何でもいいという、ものすごい空腹感。曲がりなりにも疲れ切った脳で判断を下し、石の上に寝る決意をする。

　たそがれ時、カヌーが一艘、通りかかり、声をかけてきた。適当に追っ払い、寝込もうと辺りを見回したところ、いるはいるは！数匹の大きな３０センチ以上のトカゲが！
　石を投げつけると、驚いたことに逃げるどころか、その石をめがけて飛びついていった光景には肝を冷やした。一体、どんな手で追い払えるのか？
　夜は近い、思い切ってこっちから歩いて威嚇すると、さすがに逃げて岩の隙間に入ってしまった。

代わりに、大きなネズミかモルモットの親子が、辺りの様子を伺いながら出てくる。こんなでは、このあと、どんな物が飛び出してくるのだろうかとわずかな恐怖さえ覚えた。

暗くなり、横にならざるを得ない。時は６時頃、猛烈な蚊の大群だ。恐れ入った。今日、着用していた汗と泥で真っ黒なワイシャツを頭にかぶって、横になる。くさいし、下が石で、凸凹なので、寝苦しいし、蚊の飛び交う音も気になる。

暑い、南洋なのだ。シャツの覆いを少しずらし、暗い南洋の夜空を見上げる。星がいっぱいあって、日本を思い出す。僕の友人や親もこの空を見ているかもしれない。それに、近くの海の波が珊瑚礁に当たり、砕け散る音が、ますます僕の郷愁を呼び覚まし、日本を近くする。

また、ヤシの木の影が気になる。大きな怪物の手のようで、夜空に高くそびえ立ち、今にも僕に襲いかかるような気配であった。
そして、複雑な時間のあいだをおいて、パンの木が所々でざわめく。それも風になびく音ではなくて、なにか鳥かコウモリか何者かが触れる音で、実に不気味だった。また、寝ている石の横にも、何か大きな物が動いているのだが、正体を見極めるのが嫌で、目をつぶって、何とか努力して５時間ほど寝たようであった。

あとはうつらうつらで、太陽の上がるのを、こんなに待ち遠しく思ったことはなかった。
次は空腹である。フラフラで目がかすむ。日本が懐かしい。

ついに決心して、無人島に渡るのはご破算にして、シロマサの家に向かうことにした。ゴムボートに荷物を載せ、引っ張って水の中を歩き始めた。水路には白い道の痕跡があり、太陽を背後から受けると水中が透けて良く見え、迷うことはないと思った。

しかし、終わりのほうで二つの水路があり、迷って痕跡の濃い方へ行ったのだが、相当進んだところで、見覚えがないことがはっきりした。
コンパスで確かめ引き返したが、案の定、逆の道で、船着き場はほんの目の先だった。

荷物はボートに載せてきたので、その辺は楽だった。そこで、この泥土で汚れたゴムボートを洗って、干して乾かす。
シロマサの家へ向かう道では、とうとう倒れてダウンという惨めさ！少し歩いてはドサッと倒れ、又倒れ・・・、ついに見かねたのか、どこからかおばさんが出てきて、ポナペ語でわめきながら加勢してくれた。人のエネルギーは伝染するのか！

否応なしに着いてしまったが、マッチをせびられた。それも片言の日本語で、「マッチないよ！」、だってさ。日本で聞いたら、『そんな事知った事か！』と、いわれそうな言い方！、

残念だが、僕は持ってはいなかった。

第五章　　コロニアからナンマトルへ

　カセレリアインホテルを、１１時半に出発。特別に、僕のために早く出してくれた食事のおかげで腹はきつい。この分なら相当歩けるぞと、ホテルのリーさんが、心配顔で見送ってくれる中を出発していくのである。

　およそ２００メートルも歩いただろうか、リュックのひもが肩に食い込んでくる。すでに労苦は始まっているのだ。先が思いやられる。こんなに重くなるものとは思ってもみなかった。

　道ばたの島民が話しかけてくる。日本人は気安いと見ているらしいが、「ナンマトルまで歩いていくんだ」と、言うと、
　「とんでもないことだ、道も無いような所だから無理だ、行くのはやめたほうがいい」と言って、忠告してくれたが、
　「僕は日本人だ、昔の日本人を忘れたのか？心配するな、必ずやり遂げる」と、胸を張って言い切ってみた。
　「そうか、それなら大丈夫」と、言っていつまでも見送ってくれた。

　そうは言ったものの、先がどうなるか見当もつかなかった。と、昨日、会ったバイクの青年が通りかかり、また、「後ろに乗れ」と、言う。
　昨日会った時、「明日、ナンマトルに発つ」と、話しておいたので、途中まで送ってくれるつもりだろう！ホンダ製の赤いスーパーカブだ。とてもよく走る。言い忘れたけれど、この島には日本製品があふれているのである。

　日本の昔の軍隊が残した橋の手前でおろされた。後部座席に、重いリュックを背負った人間を乗せて、随分バランスが取りにくかったと思うが、彼とその愛車はよく走ってくれた。

　降りた途端、足に重みがドッとかかり、とてもじゃないけど全く歩く気がしなくなってしまったので、「ありがとう！」と言ったまま、その橋の縁から足を投げ出して、あてもなく座り込んでしまった。

　辺りの景色を眺め、うっとりして何も考えずにいると、僕と同じくらいの年格好の青年がやってきて、「どこへ行く？」
　「ナンマトル」だと言うと、「一緒にそこまで行ってやる。案内してやる」という。

　僕の目的が目的だけに、人と一緒に行くのは嫌だったので、最初は断っていたのだが、しつこくしつこく言うので、そんなに言われては断るのも悪いと思い、「じゃ、頼むよ」と、いうことで、やっと重い腰を上げて出発進行！

もちろん、彼は何の代償も約さないで！あとから思えば非常に幸運だった。

荷物も一つ、持ってくれるというので、ゴムボートや水中マスク、足ひれ等が入っているバックを持ってもらった。《とても軽くなった。助かった！》

まもなく、ウー村へ靴を泥だらけにして到着した。
ここまでの道は、大体、日本の最低級の道と思ってもらえばいいが、この島では最高級の部類に入るそうだ。先が恐い。
しばらくして、彼が「アイ　トイレット」と言って、立ち止まり、ニヤッとしながら、傍らの木の葉を２、３枚ちぎって、藪の中に入っていった。

天から与えられた自然現象だが、おおらかなものだ。５分ほどで、顔に汗をかきかき、とても快適そうに「レッツゴー！」と言い、再び歩き出す。もちろん、彼は日本語はしゃべれず、学校で習っている万国共通語とおぼしき英語と、現地語のポナペ語しか判らないので、ナンマトルまで僕のウロな英語で心を通わせたのである。
例えば、彼が現地の人とポナペ語で話し、英語に翻訳して僕に話してくれるのだ。しかし不思議なくらい良く通じた。ここで言うのもおかしいけど、これからの若い人には英語は絶対必要だと思った。

僕は「疲れた、疲れた」と連発し、そのたびに休憩で、時が経つにつれて、今日の目的地の、ウー村のナンマルキ（村長）の家が目の奥に、花園のようにちらつき始める。とても苦しい。

島の人が、「来い来い！」と手を振る。断っても悪いと、時間を気にしながらも、呼ばれて、椰子の実やパンの実、バナナを食べされられる。一様に、日本時代の事や今の、日本のことを聞きたがり、こっちもそれに合わせて、ポナペの美しさを褒めてあげるのだが、いい加減飽きてくる。
戦争時代のことは、からきし分からないし、会う人ごとに新鮮に話してやらなければならないからだ。

夕刻、沖の無人島に陽が落ちる頃、２人はウー村のナンマルキの家に着いた。
ホッとした。これで全行程の、３分の１ほど歩いたのである。およそ１５キロ位しか歩かなかったのにすごく疲れた。着く早々、そこの岩だらけの庭で人々が３０人位集まっているのだが、そこで犬が２匹、殴り殺されていた。
可哀想に、丸太のように整然と並べられ、顔に血が飛び散り、ひどく残酷な殺し方で胸に詰まった。しかも、それをこれから食べるというのだから全く驚く。

それも島の人達は、ブタより旨いというのであるから、昼と夜がひっくり返ってしまう。
殺す直前までじゃれていた犬を！
でも、不自然さは全く感じられないから、やはり南洋に来ているんだ。それとも、頭が正常じゃないのかな？

ヤシの木が海岸に生えそろい、その頭頂部を、時折吹く風にゆらめかせ、とても筆で書き表せないほど美しく感じた。
これは僕が人並みにロマンチックだからなのか！でも、誰もが美しいと思うのは疑う余地もないと思う。

そのウー村の村長の家では、ゴチャゴチャいるチビッコ達に囲まれて、退屈さなど全く感じなかった。どの問いかけにも、僕は日本人のほこりを失わないで答えたつもりである。もちろん堅い話などはしない。
「３年後にはヨットに乗って、またこのポナペ島に遊びにくるよ」と、言えば、「３年では遅い！来年また来い」と言って、きかない。
「でも、お金がないんだよ」と言って・・・・・。

その晩、肉の、ぶつ切りを食べたのだけど、何か今、考えると“犬”を食った気がしてならない。油肉がなかったし。けれど、煮込み肉で美味しかった。『犬でもブタでも、うまけりゃいい』そう割り切ります、僕は！外国だもの、たまには変わったものを食べるのも悪くない！いい話の種になる。

その晩、一人の５歳位の男の子と一緒に寝たのだが、すごくおませの子供だった。でも土地柄がそうさせるのか、自然に受け止められた。

あくる日、８時半、夕べの残り肉とバナナの食事を済ませ、再びロベルトと僕の未知の世界へと踏み出した。昨日の疲れがまだ少し残っていて、多少リュックが重く感じる。昨日、子供たちにみやげをやって、少しは軽くなっているはずなのに。

女の子が、一人、また一人と時を異にして声をかけてくる。ポナペ語で分からない。何だろうな？、同行のロベルトに聞くところによると、僕のことが好きだという。ついてくる。困ったな！
彼女、彼らの遊びは、遊びというには極端すぎる。なにも遊ぶ施設がないから、結局そういう人間本来の本能が出るのだろうか？僕は心から遠慮して先を急いだ。
日本人のほこりを失うまいと、たいそう勝手に行動したが、誰も反感をかっていないことは明らかだった。
道はますます道でなくなり、せせらぎが走り、泥沼となり、草藪となり、靴など履いても履か

なくても同じようなものだったが、地面の中には何があるのかも分からないので、靴の中で足をグチャグチャいわせながら、今日も一日、歩くのであった。
　暑い、汗がどうどうと流れる。それが乾き、塩がふく。海縁を歩く。時は１１時、潮が引いている。沖合１キロメートル位まで、水が涸れて、マングローブの切り株が連なって見えている。もちろん水が満ちればすっぽりと大地が隠れてしまう遠浅なのだ。このような激しい潮の満ち引きがこの島の海上産業を遅らしているのではないだろうか。
　みんな海のそばに住んでいるのに、漁をしている人をいまだに見たことがないのである。

　潮が引けば、ボートもカヌーも外海に出られない。沖合の小島まで、歩いていけてしまうほどなのである。

　時間を随分食ってしまったので、近道の山越えをすることにした。小さい島だからと、タカをくくって山に入ったところが、急で、４５度傾斜の坂を、道という道でない通路を、ジャングルを登ったり下りたり、平坦になったり、コケで滑りそうになりながら、ナタで、前を遮っている木の梢や、奇怪なツルを払いのけながら、息も絶え絶えに、ジワリジワリと進む。彼、ロベルトは裸足なので、たいそう難儀だろう。
　島の人間の足の裏の丈夫さには驚かされる。何か足につけている人は町を離れると、ほとんど見かけない。そういえば、町でも裸足の人が多かった。たとえ、履いているのを見ると、それは日本製のゴムゾーリである。ゾーリはもはや英語である。

　その山を横断（彼はカットマウンテンと言っていたが）するのに、体力は８分目位使い切ってしまったみたいだ。そのため、あとは原野を歩くだけだったが、とても難渋だった。と、思いきや、道はまた次第に狭まり、身の丈もある、草の王様みたいなのが行く手を遮り始めた。

　とげのある草も多いし、鼻に引っかかってくすぐったい。それにも増して乾いた土の無いのには閉口した。休むところが無いのだ。

　彼は分かってくれて、大きな葉っぱをたわわに付けた、小さな枝を僕のナイフで切って、地面に置いてくれた。彼は僕をフレンドではない、ブラザーだと言った。なにやら、日本のやくざ映画を思い出すなあ！僕もそれにうなずいた。彼は満足気であった。

　ますます、体力が無くなってきた。
　海が近い。タモン島まではあと僅か。そこで、彼の通訳で、カヌーに５分位乗ることになったのだが、その船頭さんは、初めのうち日本語が思い出しにくそうだったが、すぐに慣れて色々話しかけてくる。あとでこの人に頼まれ事をされることになった。
　彼は日本時代の繁栄を忘れ切れず、いや、僕という日本人が来たことで、もやもやが消えて、「製材業をやりたいから、その機械を頼んで欲しい」ということである。僕は「心配しないで

よい」と言い、礼を述べて短い船旅を終えた。
（この件に関しては帰国後、知り合いの商社の人間に頼んでみたが、予算の関係で全く話しにならなかった）

あとは歩いて２時間ほどで着くらしい。時は６時でまだ明るかった。最後の力を出し、ひょうひょうとした長いゆれる橋を渡り、また、山を登り、とうとうベースキャンプともいうべき、メタラニューム村のチーフのシロマサ氏の家に着くことが出来た。
考えてみると、よく歩いたものだ。それにもまして、島の人でも滅多に歩かない、いや歩きたがらないこの道を、僕の兄弟、ロベルトはよくついてきてくれた。しかも、裸足で何の代償も約束していないのに！
忘れていたが、今日の昼は食べていないんだった。暗がりのランプの横で、食事をした。美味しかった。
このメタラニューム村のチーフの家はさすがにチーフらしく、皆の家よりすばらしい。といっても、日本の普通の家よりも落ちるが！

このチーフ、シロマサは戦争当時、日本の兵士と一緒に、アメリカ軍と戦ったそうだ。懐かしそうに、うまくはない日本語でつまりながら、大きな身振り手振りでそれを補いながら、話してくれた。それに対し僕の方は、「そうですか、そうですか」と、相づちを打ちながら時のたつのを待った。
早く寝たい、疲れている。
間もなくして察してくれて、「寝ろ」と、勧めてくれたので、大喜びで、パイプ製のベッドに横になり、明日のナンマトル冒険のことを考えながら、先ほどから降り出した、雨の音に包まれて深く眠り込んだのだ。

ここは何しろ電気がない。島の人はどこに楽しみを見出しているのだろう。朝、７時に目が覚めた。ベッドを見ると、日本を出てから風呂に入ってなかったので、アカがボロボロ、ベッドのシーツにこぼれ落ちている。オーッ、すごく、悪い気がした。手でパッ、パッ、パッと、払って取り繕う。我ながら自分に気まずい。

ちょうど、ロベルトが来て、「何時に出発するか？」と聞かれ、「８時」と答える。

皿に盛られた山盛りいっぱいのご飯と、一匹の魚で腹を肥やし、出発。山を下り、カヌーが二艘置かれた船着き場まで来て、彼がはたと立ち止まる。そして「歩いて行く！」と、言う。水の中を！
「どのくらいの深さ？」と聞くと、手で自分のへその辺りを押さえる。
「えっ」と聞き返す。やはり、間違いないようだ。

こうなれば首までないだけでも幸いだ。昔の大井川渡りの絵を思い出し、愉快になる。
「ＯＫ」というと、彼はズボンを脱ぎ始めた。赤い線のある、ポケット付きのパンツをはいている。日本の運動会を思い出す。僕も脱ぐ。捨てるつもりのパンツ一枚になり、勇ましく、リュックを高く背負い、靴のまま水路に入った。

初め、泥深かったが次第に、ここはカヌーの水路なので、カヌーが船底でこすったとみられる白い道があり、そこは少し堅く、楽にヒザで水を切りながら歩けた。
彼の後ろ姿を見ていると、現実に僕は探検をしているんだという実感が湧いてきた。僕はその探検隊を指揮している隊長なのだ。子供のようにうれしくなった。

所々、ブクブクと足が沈み、よろけ、重いリュックを背負っているので倒れそうになる。もし倒れたら、一大事とばかり、器用に重心を調節してもち直す。もし濡れたら本当に、これからの無人島生活が駄目になるものも入っている。慎重に足を運ぶ。

両岸にというより、この水路を形成している多くの小島に、巨大な石が人工的な細工を施されて、たたずんでいるのが見える。
わくわく胸がときめいてきた。すでにナンマトル遺跡地域に入っているのだ。カヌーが一艘、向こうから登ってくる。すでに水は引き、浅いと見えて船底がつかないように、一人が降りて歩いている。皆さんは想像がつきますか？船と一緒に歩く光景を！

向こうは驚いたような顔をしている。「カセレリア！」と、一言いって、あとはロベルトがポナペ語で、なんやかやと少し喋っていた。僕には何も分からない。

あとで、彼に日本語をどう思うかと聞いたところ、「とてもいい、英語なんかより世界で一番美しい言葉だ」という。たとえお世辞でもうれしかった！
でも、ロベルトは本気でその時、そう言ったのである。

歩きながら、日本の歌を歌った。加山雄三やソフトテンポなやつを歌った。そのうち、数曲歌うと、彼は気に入ったような顔をしながらも、「解らないから英語に直してくれ」という。直訳でやっても日本の詩は訳すのに難しすぎる。「ディフィカルト」と言って、やめてしまった。
反対に彼に、「ポナペの歌を聴かせろ！」といって、一曲歌ってもらったが、異国情緒たっぷりな聞き味だった。
「もっと歌ってくれ！」と言うと、もう知らないと笑う。こういう島だと作曲者もいないことだし、無理もなく可哀想だ。民謡でもないものかと思う。
でも、彼も僕が歌った日本の歌をそう感じていたのだろう。
こうするうちに、４０分間の水中行進は終わりを告げた。ナンマトルの東の端の、最も大きい遺跡のあとが正面に見え始めた。ここに上陸するつもりである。
島の入り口の、崩れた石を足掛かりにしてついに、日本から遙々遠い、南洋のナンマトル遺跡

に足を踏み入れ、手をついたのである。こうなると一刻も早く、彼を家に帰したかったのだ。一人で、ゆっくり宝を掘り出すつもりだった。本気だ。

　そこで彼に、土産をやり、「君はもう自分の家に帰らねばいけない、君の親が心配している」と言ったが、「気にするな」と言って、一緒にここにいるという。それではと、「のどが渇いたなあ」と言うと、見るまにヤシの木に登り、１０個ばかり、ドスンドスンと今、あげたばかりのナイフで切り落としてくれた。

　早速、その身の端を切って、２個３個と中の液体を飲み干した。うまい！彼はその飲み終えた実を真二つに割り、中の白いコプラを食えと言う。どんな物かと、その、日本のハンペンみたいな、ヌルヌルしたものを一口、二口、噛む、味わう。油肉みたいでもあるし、油の入った濃い牛乳みたいでもある。　やがて気持ち悪くなり、捨てる。
　島の人は最高にうまいというが、僕の口には合わなかった。好き嫌いの条件はこういうところでは出せるはずがないがどうしても食えなかった。でも、貴重な体験だった。

第六章　　ナンマトル遺跡　２

　この島は全てが石で成り立ち、土の類はひとかけらも無く、心の安らぐ場所は見あたらない、殺風景な島であった。
　砂浜でもあれば、こよなく横たわり、南洋を深く愛することも出来たのであるが、そんなロマンチックなところは無く、サンゴと石のトゲトゲ、ギザギザの固っ苦しい島だった。というか、自然美のない人工島の面影さえある。

　ナンマトル遺跡は一つの島ではなく、数多くの石で構成された、一群の多数の島群であり、僕の上陸したのはその内の三つである。

　対岸の島に、食料調達のためバナナを取りに行った。約１０メートル程の水路幅で、ゴムボートを膨らませて渡った。
　バナナの実は、たわわな一房だけが１本の木になり、先っちょに赤い、厚い肉厚の白い粉をふいたような、頑丈な花が咲いていて、グーッと地面に向かって垂れ下がっている。
　その島のバナナだけではないけれど、皆、青くて皮をむくにも堅くて、食欲が薄れる。白い汁が出てきて、手がベタベタになった。
　食べると、いや噛んでみるとバサッとして、あじも素っ気もない。パサパサのカスであった。このパサパサのカスがあの、黄色い丸みのある味になるとは、到底考えられない。とても意外だった。

　空腹をこらえて、本上陸のこの島で、パンの木の実を必死に棒で取ろうと、何回も叩いて、この由緒ある遺跡の石垣の上からやっと一つ落として、食事の支度に取りかかった。

　その実をナタで４つに切り、青いバナナを何本か添えて、火で焼く。燃料は枯れ葉と何本かの乏しい木の小枝を、必死につぎ足しながら、３０分くらい焼いたのであるが、まだ時間が足りなかったとみえて生である。バナナはグシャグシャで味はない。パンの実はおそろしい程の生の味だ。とうとうこの島で、長期に何かを調達して食べることは難しいかもしれない。

　島は西側に、海の水が入り込み島の間をぬって、島民たちの登りの一方通行のカヌー専用通路となっている。そして１１時頃には、潮が引いて川底が見える。そうなるともう。ゴムボートでも通行できない。
　しかし、完全には引ききらないで、その水たまりには、色模様の綺麗な魚の群れがいっぱい見えた。食べられるのではないかと、日本から持ってきたモリ先に棒を付け、狙いをつける。一匹かすったのか、モリを離れて浮かび上がり、白い腹を見せて流れる。
　モリを投げて止めようとしたが、流れがあって、かなり急に流れているので、止めることは出来なかった。
　足に怪我をしていたので、飛び込む気にもなれない。

島の東方の沖には二つの島が見える。ナガプとナパリと呼ばれている。その海岸線には白い砂浜がその島を取り巻いていて、ヤシの林が僕の心を打つ。ぜひ渡りたかったが、渡る手段がなかった。
小さなゴムボートを持っていたが、自分一人の身さえも、安全に運べるか疑問だった。
リーフの中といえども、波も高く、鋭いサンゴも海面にいくつか白い波をけ散らしながら顔を出している。
そこを大きな荷物さえも運んで、果たして渡り切れただろうか。転覆したら、たちまち鮫の餌食かもしれない。事実、海岸べりで３メートルくらいのサメを５メートルと離れていない所から目撃したのだ。
まだ犬死にはしたくない。それどころか、腹が減って１０００メートルも、ボートを漕いでいく力が続くかどうかも疑わしい限りだ。
もし、幸運にも渡れたら、ねぐらを探して、少なくとも一週間暮らして、黒サンゴをたくさん見つけるか、また真珠貝でも見つけるつもりだったのだが、やはり人間一人の力は小さいものかということを悟っただけでも、無益なことをしたわけでもなかったと思いたい。
次は、このことを参考にして、ここら辺の島を、片っ端からヨットで巡りたいのであるが、何年先になるだろうか。

やはり僕も人間なので、全動物共通の、天なる神より与えられた生理現象が起こってきた。文明の遺跡の中に、臭うものを置くことは、非常に気がひけたのだが、かまうものかと・・・
島の人は、葉っぱでこするが、やはり僕は文明人なので紙を使う。あとで来る人間に悟られるとまずいので、枯れ葉をかけてごまかす。
何故かというと、僕がここに滞在している事は、僕が歩いてきた道の全ての人が知っているからだ。
日本人の恥をさらしたくないのだ。誇りはいつも失いたくない。時が来ればあれそれは風化してしまう。それまで見つからなければいい。それが僕の良心でもある。猫には負けたくない。

カヌーのおじさんが、夕刻、通りかかったが、しきりに「ここに泊まるのはやめなさい、恐いところだ」と、説得してきたが、馬の耳に念仏とはこのことだった。やはり、何事も一回はやってみねばならないと、常日頃から思っていたことだし、これこそその内の一つだった。
よく、やらない前から無理だと決めつける人間がいるけど、近頃特に多いと思うけど、僕はそうではない。体でぶつかるのだ。

あとで聞いた話だが、このナンマトルでは幽霊が出るそうで、島の人は夜、絶対に近づかないそうで、この島に泊まるのは世界で初めてだったらしいというのだ？今夜、雨に降られなかったのは幸いだった。

何故かというと、このポナペ島はミクロネシアでは一番、雨が多い島で有名で、水には困らないということである。そのためか夜は少し冷えて、朝起きると服がしっとりと濡れていた。
腹さえ空腹でなかったなら、この朝の清々しかったことは、筆で表せない幸福感を味わえるはずだった。
少したつと、重要な判断に迫られた。次の行動である。多くの考えから導き出した結論は、やはり出来るだけ早く、シロマサチーフの家に戻ることに決定した。
すぐ、実行に移すことにする。
上陸した日に、足を切ったので、川の中を素足で歩くのは危ないため、ゴムゾーリを履く。靴の方はせっかく乾いたのだから、濡らすのが惜しかった。ただ、ゾーリを履くだけでは泥にめり込み、ゾーリが泥と密着して次に、足が先に進まなくなるので、ロープを何重にも昔のわらじのように、足下に巻き付ける。
水が引き去る前に、ゴムボートに荷物を積み込み、引っ張って前進する。何せ、この水路は数十の島の間をぬっているので、道に迷うのではないかと、いくらか不安だった。しかし、まだ、陽も昇ったばかりだし、コンパスや地図を持っていたので、そうした不安は打ち消すことができた。

歩くとまもなく、足のロープがゆるむ。着くまでに何回となく結わえ直したのだった。
帰る途中、まだ宝の夢が捨てきれず、途中の一つの島に上陸を敢行した。泥深い水路を注意深く進む。
マングローブが島の周り一面に、びっしり生えそろい、上陸は困難を要した。
しかしまもなく、石の足掛かりのある所を発見し、上陸できた。
やはり石や珊瑚の瓦礫ばかりで、もし足にゾーリを履いていなかったら、とても２メートルさえも痛くて歩けなかった。墓穴を探そうと躍起になったが、徒労に終わる。空き腹に益々拍車をかけたようなものだった。シロマサの家に早く戻らねばと心は騒ぐ。再び水路を歩き出す。

帰り、どう道を間違えたのか、だんだん、水路の道が泥深くなり、来た時の見覚えがない。確かめる上で、ボートの荷物から地図とコンパスを取り出して、確認する。すると今、向かっている方向ではますます奥へ入り込む正反対の道だった。急ぎ引き返す。目印はつきあたりの島に、大きなヤシの木が中を開けて、７本立っている姿である。道が分かれる時、用心のため目印を付けておいたのだ。
そこまで戻るのにはそう難しくはなかった。ただ、水面を、首筋回りを多くの蚊が飛び交い、刺されたくらいであった。船着き場までは容易であった。

その船着き場のあるタモン島に上陸し、ドラム缶にあった真水で、身体やボートを洗ったが、何か油くさかった。
そして素っ裸になっているところへ、人が来てしまった。何のことはない。外国人見物と決め込んで、こっちは裸で身動きも取れないというのに、しゃがみ込み、日本語でしゃべり込んでくる。

　それは決して面白くもない、ただ沈黙を創るまいとする無意味な会話なのに立ち去ろうとしない。そこは日本人で、うまい技巧の元に立ったままで、海パンを履くことが出来て窮地を脱した思いだった。
　まもなく、身体も乾いたので、服を着る。ボートもたたんで荷物をかついで出発しようとするが、その男は暇そうなのに、荷物の一つも持ってくれようとしないのには、来る時には兄弟のロベルトが持ってくれた荷物もあり、腹の空いている今の僕には、そばに人がいるために、精神的に余計辛かった。

　シロマサ氏の家に着くまでに、疲労で６、７回、倒れてしまったが、何とか山を登り切り、たどり着くことが出来たのだ。入り口にあった天水桶の一杯のコップの水を、天の水ともいえる感謝の気持ちで飲み干した。

第七章　　ソニー・マカヤ

　このソニーとは、コロニアからナンマトルまで歩いた途中に、泊まったウー村のナンマルキの家で知り会った人である。その時に、「黒い珊瑚が、僕は欲しいんだ」と、言ったところ、「そんなのはいくらでも取れるからいつでも来なさい」と言ったので、ナンマトルからの帰りに、なんとしても手に入れたい思いで、こんどは一人で、山の中を慎重に、コンパスと地図を頼りに、彼の家に何とかたどり着くのである。

　途中で、キンタロウという名前の若いポナペ人が、ソニーの家までの案内を何故かかって出てくれた。
　川に掛かる丸太を敷いた細い橋の上で僕が転んで、川に真っ逆さまというところを、素早い身のこなしで僕の手首を強い力で掴んで、びしょぬれになって、身体を岩に当ててぶっ壊さずに済んだのである。
　リュックの重みが身にしみた。人への限りない親切な行いは永遠に相手は忘れないと思う。

　ソニーの家に着いた時、彼は漁に出ていて居なかったが、彼の奥さんと彼の弟のエルリンがいた。まもなくソニーは帰り、カヌーから「ハロー！」と、叫んできた。安心してキンタロウは去っていった。

　心の中では早く、黒サンゴが欲しいとあせるばかりであった。しかし彼は漁師だ。漁を休んでまで、この僕のためにサンゴを採ってくれるのだろうか？

　夕食はパンの実と、お茶と魚の煮物、海水を使って煮込んだものだが、腹がとてつもなく空いていたので、凄く凄くうまかったの一言につきる。食べるうちに、辺りが薄暗くなりだした。
　そこへ、お決まりの日本製の石油ランプだ。ムードはあるが、蚊が寄ってくるし、大して明るくもない。こうした生活を目の当たりにすると日本はやはり、いい国なんだ？

　その夜、子供たちやソニーらと１０時過ぎまで、日本では２時間遅れて８時頃であるが、話しをしていた。みな野球が好きで、毎日、夜には日本のラジオ放送を聞くのが日課になっているという。日本に帰ったら、王、長島によろしくと言いながら、その晩も日本の”ニッポン放送”を日本製のトランジスタラジオで聞き惚れていた。

　疲れが出てきたので、失礼して早々に寝た。ところが、何十、何百匹という蚊がいて、追っても追っても止めどもなく攻め寄せてくる。死ぬ思いで寝返りをうち、タオルをかぶるのだ。『蚊取り線香があればなあ！』
　この家は壁もなく、柱があるだけ、で虫は入り放題だ。海辺の高台にあり、うしろは南洋の果物や木が生い茂っている山である。

翌日は日曜日で、プロテスタントは働かないという。何もしないという。『いつも大して働いていないのになあ！』と思う。キリスト教の伝道者が恨めしい。
サンゴは延びる。『でもまあいいや！』

子供たちと山へ鳥を捕りにいき、大きな水鳥を素手で捕まえた。『鳥までも、ここではのんびりしているのか？』
その裏山ではマンゴーをたらふく食べた。子供たちとは言葉は英語しか通じなかっが、けっこう意志は通じていたようだ。とても素直な子供たちだった。

彼らの家では少ない仕切壁に、日本の女優の佐久間良子と浅丘ルリ子の大きなポスターが貼ってあり、子供たちは「おれはこの佐久間良子の方が好きだ」と、盛んに連発していた。日本の女の人はほんとにキレイである。同国人であるので自慢してやりたかったが、自慢が現在なんになるのか、必要ではない。
それに日本の本を２冊、日本の船乗りから、貰ったらしいがとても大切にしていたのだった。

「そんなに日本の本が欲しいなら、日本に帰ったら送るよ」と言った。そしてまた、「すぐ来るから、それもヨットで、３年後に」と言ったところ、「３年では遅い！」と、しきりにぼやいていたが、金がないことを納得させるのに大変だった。

その日のうちに、持ってきた荷物から高級水中マスク、シュノーケル、ナイフ、水筒、モリ、薬など手当たり次第にやってしまった。それは担いできつい思いをする荷物を軽くするためでもあった。

夕食の、ご飯のおかずがないというので、子供たちだけで魚を捕りに行くことになった。
それで面白そうなので、僕もついていくことにした。『カヌーで漁なんて格好いいなあ！』と思っていたけど、時間がたつにつれてその単調さに飽きてくるし、櫂でカヌーを漕ぐので結構疲れたのだった。

彼らの方法というのは、浅いサンゴの台地の海底の海に、ナイロン製の縦１メートル、長さ５０メートルほどのすごく長く下側におもり、上側に浮きを付けた香港製の網を使う。片方ずつを地下足袋を履いた２人の子供達が引っ張りあって持ち離れていく。カヌーの方では、魚を追いつめるため、遠巻きからグルリと網の周りを回り込みながら、水面を棒で叩き、網の方に魚を追いつめる。
明るい空の下の海の水を透かしてみると、綺麗で、これでも食用になるのかと思われるようなカラフルな魚が、いっぱい引っかかっている。
それを口で魚の頭を噛んで弱らして、うまく網から外す。それをカヌーの中にポンポンと放り込む様は見ていて本当に面白い。

適当な時間で、引き揚げた。その帰りの海水の温度が異常に暖かい。風呂を基準にすると３８度くらいはあったように思う。聞くところによると、英語ではっきり解らなかったが、なにかの土地の現象であるらしい。カヌー上にある身体までが湯気に包まれ、ホカホカと温泉にいるような気分になってきた。もしかすると火山でも近くにあるのではないかと思った。

夕食には米を出してくれたが、僕としては、外国に来たのだから、その土地のパンの実を食べたかった。実は本当に、パンの実が気に入ってしまったのだ。

その日も暮れて、寝床についたのだが、また蚊の大群だ！昨日より激しい。満月になると多くなると言う。そういえば今日の夜は月が青く美しい。
とうとう、あまり激しく、僕がのたうつのを見かねて、蚊帳を出してきてくれた。
『助かった！やっと生きた心地がする』、　死ぬ思いだった。これは決して、オーバーな表現ではないです。

翌日、希望が叶って、ついに黒サンゴを採りに出かけたのである。しかし、悲しいかな、ソニーの言う黒サンゴとはただの白サンゴに藻類がくっついているやつだったのだ。
色付きの綺麗なサンゴはいっぱいあったけど、それらは安物で無価値だ。空中に出すと白くなる。象牙質のものではない。
期待は大きく外れた。仕方がない、これまでだ。全て諦めて、日本に帰る決心を固める。

その日の午後３時半、すでに僕は日本に帰るべく、エンジンを付けたカヌーでコロニアに向かっていた。波は静かだが、少しの波でも小さい船なので、しぶきが上がる。浅いサンゴの海を、へさきに一人立って、浅瀬に乗り上げないように器用に櫂を当て、進路を変える。ソニー家の４人で僕を送ってくれたのであった。

約１時間後、懐かしのコロニアハーバーに着く。波止場の少し手前のところで、ガス欠していたカヌーを引っ張ってやる。その夜は、ソニーのコロニアにおける親戚の家に泊まらせて貰ったが、急であまり歓迎されなかったようだ。

久しぶりにコロニアの町を子供たち１０人くらい引き連れて、散歩した。その途中、なんとカセレリアホテルで牛島さんと会った。一緒に８時に井川さんにお礼を申し上げに行って、その帰り、ポナペで一軒というバーに、牛島さんに誘われるまま入ったが、昼に食べた真っ赤な色付きキャンデーのせいか、腹がシクシク痛くなり早々に引き揚げてしまった。

時間は１１時、そっとソニーの親戚の家に戻り、土間に敷かれた民芸品のような敷物の上に倒れ込んでしまう。化膿止めの錠剤を念のため４錠飲んで、蚊取り線香の煙と共に寝入る。

朝になり、その朝食をたらふくにご馳走になり、お礼に最後のライターをあげて早々に出発した。
何故かと言えば、都会の狭い家で、これ以上じゃまするのが非常に気がひけたからである。
夕べは相当無理して、家族は詰め込まれて寝ていたらしかった。

第八章　　カセレリア

　その家を出てから、２時間ほどヤシの木の下で、グアムのことなどを思い浮かべて時をつぶした。
　なぜかグアムが恋しい、あの人達に会いたい。今は日本よりもグアムに惹き付けられる。
　思いを引きずりながら９時に、カセレリアインホテルに着いた。
　すると、突然舞い戻った僕に、支配人のリーさんからビックリ笑顔で、もう今日の飛行機で帰る日本人乗客名簿の中に、お前の名前があるよという。名簿を見せてくれた。紛れもなく僕の名前が載っている。何故だ？、不思議だった。とても嬉しかった。予約も、予約確認も一切してはいない。
　あまりの意外さに、ビックリして我を忘れた。この旅の奇跡のうちの一つだ。気の向くまま島を動き回り、そしてたまたま、コロニアに帰ってきたのに！こんな偶然が普通では起きるわけがない。決して人為的な操作はできるはずがない。これはいつまでも僕の心に真実の奇跡として深く刻まれるはずだ。

　早速、リーさん（リー・メンディオラ・タガミ）に、嬉しくてこの旅で命から２番目に大切なコンパスをプレゼントした。
　はや心はグアムに飛んでいた。このポナペに来て、リーさんに、すぐ滞在許可延長をサイパンの本部に問い合わせてくれるよう頼んだのだが、僕の英語は通じなかったのか？でも、結局それの方がよかったのであった。

　リーさんに例の、かぶりつき美味い昼のトンカツサンドイッチ弁当を無料で頂き、タッチアンドゴーで、一円もかからずに１２時、ポナペ島の土産の胡椒を、ホテル売店で５個ほど急いで買って、せかされて連絡船（上陸用舟艇）に乗り込んだ。　ピースコープボランティアのアメリカ人キャロンもいた。トラック島まで行くそうだ。

　昼２時頃まで、沖の小島で待機し、まもなく懐かしの愛すべき水上飛行艇が、はるか彼方の空から点と音として見え始めた。向こうに見えている長距離列車をホームで待つ思いだ。期待のうちにほどなくして機上の人となったのである。

　来る時と同じで、東京都立大学人類学研究室の牛島さん達とも再び同行してしまったが、これもまた大不思議だった。僕には帰る予定は最初からなかったため、話したことはないのだ。その牛島さん達とはトラック島で別れたが、大勢の中の独りぼっちは寂しかった。一人きりの一人なら何でもないのに！

　カセレリアとは、ポナペ島の挨拶の言葉で、日本のこんにちわと同じで、一日中通用する。
　島の人に「カセレリア！」というと、日本人に挨拶されると嬉しいらしく、顔をほころばせて「カセレリア！！」と、返してくれる。

　初めのうちは良かったが、もう旅の終わりになると慣れきってしまい、なるべく島の人の顔を見ないようにして、やめてしまった。でも永久に、僕はカセレリアを忘れない。

　ポナペに着いて、最初にした冒険が、ヤシの木に登ったことであった。
　テレビや映画の現地の人のようには、もちろんうまくいかない。登って、ヤシの実を二つ、ねじ切って落としたあと、ゆっくり降りようとしても、自分では少しづつその位置に止まっていようと思うのだが、ズルズルとずり落ちる。
　一気に落ちないように、ただ、しがみつこうと頑張る気持ちで精一杯だったが最後はズドンと落ちた。

　下に降りてみると、両腕、両足に無数の血の線が走っていた。その痛みを我慢して、落としたヤシの実を、ナタで割ろうとするのだが、表側はシュロの繊維みたいで柔らかだが、中の実の硬いことといったら、まるで石みたいで、ナタの刃が嘘みたいにひん曲がってしまった。

　奮闘の末、やっと小さな穴を開けて中の液体を飲んだ。腹が空いていたせいでとてもうまかった。

　ヤシの木は島中に生えていて、歩いている時、気軽に声をかけられ、ヤシの実やバナナを勧められるままに食べた。結構、飽きてくる気もしないではないが、日本の国を良い国と信じている彼らの前を、素通りする気にはなれなかった。

　バナナの木にはたくさんの種類があり、丸いのや、小さいのや味も色も違うのがあるのだが、やはり日本で普通に食べている形のものが一番うまい。

　そしてこれは、コロニアの町での事だが、日本で５００円位のものがたったの１５セント（当時、約５４円）、天井に吊ってある大きな房から、でかいナイフで切り離す。それを買ってすぐ食べたところ、渋柿のように渋いので、翌日まで放って置くと、普通の味になっていて、たらふく食べられた。
　こんなにあると、別に食べたい気分は起きにくく、腹が空いた時だけ手が出る程度であった。島の人はブタの餌にしていると聞いた。

　山の中に大きな大木が一本、堂々と立っている。ソニーマカヤの子供の、ヨーネルとユベールと一緒に、その下までゆき、ヨーネルがその木に登って、枝をユサユサ揺すると、ボロボロバーッと地面に派手な音を発し、実がいっぱい落ちてきた。手当たり次第に、洗いもしないでかぶりつく。黄色で、スジの多い南の味のする甘い果汁たっぷりな、果物のマンゴーである。
　大きさは子供の握りこぶしくらいで、ピーマンのような緑色。光沢はなく、黒いすなつぶをまぶしたような風体。腹が水腹になるくらい、喉をベタベタにしながら食べる。
　およそ２０個くらい食べたと思う。そんなに多く食べられたのは、その実の容積の半分が中心にある、大きなタネだった。記念に日本に持ち帰ろうと思ったが、腐ると思われるので諦める。

本当に果物を思い切り食べたのは初めてだった。

（この時、未熟なカチカチのマンゴーを１個、税関を無視して持ち帰ったのである。もう、時効であるので今、書いている。食物検疫があったため、日本に持ち込めないことは知っていたからだ。母にぜひ食べて貰いたかった。熟れたマンゴーを母は喜んでくれた）

この島の食事は、パンの実が５月から１０月頃までが主食になっている。
このパンの木はとても大きな大木で、葉っぱはヤツデのようで、ブラリブラリと重そうにぶら下がっている。大きさは人の頭くらいで、地面に穴を掘り、石を真っ赤に焼いた上にのせて、土をかぶせ約１時間蒸し焼きにする。とても手間がかかるのだ。

そして焼けたあと、４つに割って、スプーンでほじくって食べると、意外にとてもうまい。数回、食べ続けるうちに、日本の米よりうまい位でとても気に入ってしまった。
味は主食らしく薄いが、サツマイモとジャガイモの中間の味とみれば間違いないと思う。

しかし、このように自然に手に入る食物が豊富なために、一般に南の国というのは発達が遅いのだろうか。それに島の人達は文明国に頼りすぎている。自分たちで独立を考えることは思いもよらないという。村長までが、そのような考えだから無理はないだろう。

（１９７９年、自治政府発足、初代大統領は日系のトシオ．ナカヤマ氏。現在はミクロネシア連邦として独立し、１９９１年国連加盟をしている）

いずれにしても僕、いや我々都市に住む人間達は、このような、さびれた異郷がポツンと取り残され、こうしたところに遊びに行くことに、紛れもない喜びを期待して、こういう所を残しておきたいと願うのは真実ではないだろうか。

グアムの店で、パイナップルを２５セント（約９０円）で買い、トラック島まで持っていき、そのホテルでムシャムシャ食べたまでは良かったのだが、その後、すぐに腹をこわして調子が悪くなり、島に着いてから、たまたまトイレがどこも空いてなくて、夜、ホテルを出て、野ダレをしてしまったのだが、あまりに量が多いので、イザッて場を変えないと、盛り上がってしまう有様だった。

そして、食べる時は舌が何故かしびれるが、大きなナイフで皮をむき、一人で丸ごと食べた気分がすごく良くて、味と量にすこぶる満足する思いで一杯だった。

第十章　　トラック島

　ポナペに行く時は乗り換えのためだけで、トラック島での滞在時間は僅か２０分ほどだった。
　しかし帰路は、信託統治領（トラスト・テリトリー）のトラック島ビザが無かったのだが、乗り換え便のDC－４が未着のため、一泊をトラックのホテルに泊まざるを得ないのだった。しかし有料である。

　入島事務も極めて簡単で、”はいそれまでよ！”といった感じだった。
　このトラック島までの交通機関でも、２人の日本人と一緒だった。グアム～ポナペ～トラックと全くの偶然であったのだが、おかげでその間、寂しさや、日本恋しさなどの感情は一切無かった。感謝しないわけがなかった。

　彼らは大学の研究室の同僚で、極めて酒の好きな御仁であった。ポナペでは古い酒場に誘われたのだ。
　生まれてこのかた、ポナペであのような酒場へ入ったのは日本でも無くて、この旅行で知った初めての経験だった。”旅行”と書いたが、実際最初の闘志はどこへやらで、旅行なのである。少し情けない自分を見てしまった。

　ここらのビールはすごく強い。商品名；バドウェイザーというアメリカのミルウオーキー産。ビンでそのまま飲んだ。アメリカの西部劇のカウンターそっくりで、立ち飲みである。カーボーイになった気分だった。

　そうした想いでを残し、彼らとはこのトラック島で、ついに別れることになった。
　すると何やら寂しい気持ちが、心の片隅でかま首をもたげてきたのだった。しかし本来ならば一人が当然なんだからと自分に言い聞かせて、自制したのだ。

　大勢の外人、異国の言葉、その中で一人の日本人は日本人のほこりを失うまいと、日本の代表者であるかのごとくに振る舞った。広い空港の中に立ち、遠く水平線を見つめ、そこに浮かぶいくつかの島々に思いを馳せ、孤独を忘れた。
　なにも寄りかかるものは無い。ただ、地面に立つのみ。異国だ。僕は強がっていた。でも決して弱くはなかった。

　ホテルに着いて、森さんが訪ねてきてくれた。我々日本人を快く歓待してくれて、何か不明だが「これが義務だ」とも言ってくれた。ここまで同行した２人の日本人は、その後、たいそう世話になったことだと思う。
　トラック島の感じとしては、ポナペよりも良い雰囲気とはいえないものがあった。
　だだっ広い道、低い台地、丘の上に立つ赤い標識灯、口をつぐんだ島民、ホテルの中の酒場、やたらに飛ばす車。

ここはポナペより格段に人間がせわしなく動いている。

ポナペ島を選んで良かった？しかし、これはこの飛行場のあるモーエン島だけかもしれない、僅か１日の滞在で、このトラック区域を全く判断するのは無理かもしれないが、初めの印象が悪かった。飛行場が良すぎる。吹き流しなどが立っていて、柵もある。安全運行的に当たり前なのだが！
また、そこに沿って、広い道が走っているのも良くない。勝手な考えだが、都会風に開け過ぎなのだ。この見方は旅行としての思いであり、今回の目的と比べる筋ではないことは分かってはいる。

ミクロネシアの自然は失われようとしている。勝手な理屈だが、我々都会人は本当の自然が恋しいのである。

昔、ここは日本の領土で、海軍艦船の大集結基地で、戦艦大和、武蔵など、このトラック基地にその偉容を呈していたらしいが、今日、このミクロネシアに一つの日本領があれば最高に嬉しいのだが！

トラックのホテルでは３人部屋に入った。着いた時、ノックもしないで飛び込んだので、さぞビックリしただろう。１人の外人が、アメリカ人がベッドで寝ころんでいたのである。こういうのが日本人だと相手は思ったかもしれない。僕も驚いたけど！旅人は許し合えるのだ？彼は日本語が少し使えた。

ホテルではこのトラック島のホテルに限らず、洋式トイレなので気持ちが悪く、座るところへ座れず、便座に足で乗っかって用を足したのである。外の方が絶対いい。

翌日、昼食を食べ終わるやいなや、出発だから用意をしろという。すぐ宿泊代の９ドルを支払い、緑色の政府の車で空港へ直行した。
何しろ、トラック島の滞在許可が無いものだから、早く僕を出したいのだろう！優先的に飛行機に乗せるという話しだった。でも、逆に言うと強制的に乗らされたのかもしれない。

昨日まで、他の島に病人が出たらしく、しばらく便がなかったというので、大勢の外人達がいるにもかかわらず、飛び込みに近い状態で乗ってきた、この日本人を！でもこれが本当の旅であり冒険なんだ。

第十一章　　ポナペ島からグアムアガナ空港

　帰りの交通機関ほどまだるっこいものはないと思うのは僕だけなのか？
　しかし、遅いとは言いながらも、実際には行きよりも１時間も早く着いたのではあるが！

　僕個人の見解からすると、地球は右回りで、今乗ってきた飛行機は左方向に移動した。物理的法則でも常識でも、風の影響を受けなければ、行く時と帰る時の道は同じだから、当然早くなるのだと！？

　やがて高度が下がり、耳がおかしくなってきた。前方に黒い陸地が長々と海の上に横たわっている。
　『果て、どこの大陸かな？』と、思うそばから、「まもなく、グアム島に着くので、ベルトを締めよ」との、アナウンスでもって、グアム島と知った。

　『大きい！』まもなく、ヤシの木々が箱庭のように行儀良く立ち並んでいる景色が肉眼でも見えてきた。
　滑走路が見える。緩やかに旋回して、アガナ空港に滑り込んだ。
　手続きは日本からグアムへ来た時より、少しうるさかった。でも、汚い洗濯物だらけのカバンのおかげで軽くパスした。
　さてお次はホテルだ。ホテルの車は来ていないかと表に出てみるが、姿はない！
　さて困った！ホテルに電話しよう！

　電話帳で番号を見つけて、１０セント玉を電話ボックスに入れダイヤルする。最初に下手な英語で日本語の話せる人はいないのかと聞く。
　「しばらく待って」と、返事がきたが、すぐに「いない！」と、きたのだった。
　これは困ったものだ、それじゃ話すかと、おもむろに、
　「今、空港に着いておたくのホテルに泊まりたいから迎えに来てくれ！」と、言うと、
　「分かった、待っていろ」と、言うので、待つわけなのだが、とうとう空港には僕一人きりになってしまった。迎えに来る様子がないのである。

　わびしいものである。なぜか社会に見捨てられたような気分だ！
　それじゃあと、福田さんの家に電話をする。初めから福田さんに電話をすればよかった。

　彼を待つ間、空港ボーイ達４人と話し込んでいた。
　「君たちはこの珍しい天使の像の５０セント玉、持っているか？僕は持っているぞ」と、もったいぶって見せてやったりして、旅の話しなどをして彼を待っていたが、いっこうに現れない。空港ボーイ達も心配してくれたが、『こうなりゃ、もう歩いてしまえ』と、重いケースを持ち、歩き始めた。重い、腕が棒になる！

『福田さんは来てくれるのか？』

アメリカ大陸風の、太い大きな道を１５分ほど歩いたところの、ゆるやかなカーブを曲がりきった時、なつかしい緑色のフォルクスワーゲンのバンが見えた。

彼だ！スーッと、僕の横に止まった。嬉しかった。
ホテルは満員だそうだ。ホテルの車が来ないわけだ。そのホテルにチェックインしたての日本人２人が、面白そうだと、この車に一緒に乗ってきていた。わざわざホテルに行き、空き部屋を確認してくれていた。その日本人が、「じゃ、俺たちの部屋に来い」と、言ってくれて「俺は床に寝るから」と、嬉しいことを言ってくれたのだ。信じられないけど、旅はやめられない情緒の宝庫なのである。
彼らは次に香港に行くという。お金の話しは一切でない。『本当にありがとう！』　と僕は叫んでいた。こんな優しい日本人が、いい人間がいたのだ。

彼らは福田さんの家に呼ばれていたところに、僕からの電話で迎えに来てくれたのだ。僕らは再び福田さんの家に戻って、遅くまで皆で楽しい話しをしたのだった。

第十二章　　ポナペからグアムの第一日目

　その晩はさんざん福田さんからお説教をされたのだ。グアムの親父という感じで！おかげでなぜか一緒に彼の家にいた７人ほどの日本人達と、賑やかに過ごす内にドンドン仲良くなった。

　その日は、これから東南アジアの方へ廻るという親切な２人組の部屋で、ホテルには内緒で泊まることになった。
　ジュンさんというその人は、運の悪いことに、１００ドルを無くし、また時計も失うという有様だった。聞いてとても気の毒になったが、僕には何もしてあげられなかった。これから香港に行くというのに！

　翌日、すぐにグアム、東京便の予約をする筈だったが、福田さんと彼ら日本人の先約の、メリゾからココス島へのモーターボートで、サンゴを採りに行くという話しがあり、心の中で明日、日本へ帰れるだろうかと考えつつも、彼らを送りにメリゾまで行くことになった。おそらくそのサンゴは安物だということは想像できたが、言えるはずがない。

　のんきなもので、福田さんが一生懸命運転しているのに、一部の人間であったが、グウスカ眠りこけているのだから、全く無神経な日本人もいたのだ。

　着いてみると、時間を間違え、引き潮でボートを出すことが出来ない。なんやかやと喋っている内に、小さいボートでならばと、話はまとまり、無駄な時間（僕の）をはさんでココス島目指して２往復する。快適そうだった。

　そして僕と福田さんは彼らを見送り一路、アガナへ向かう。予約だ。『大丈夫か？』心ははやる。もし明日の便に乗れないと、７０ドルとその次の便までのホテル代などで、無駄に１００ドル余りを使い切ってしまうことになる。そうなれば、日本でしばらくの間どうしよう！広告会社もグアム島から航空郵便で退職届を送り、辞めてしまったのだ。土産も買えない。グアムの地図が書いてあるネッカチーフ、絵葉書などが欲しいが買えるだろうか！
　神に祈る気持ちで午後１時過ぎ、パンアメリカン航空のオフィスに着いた。席は無事取れた。
　あとはどうでもなれと、アガナの町をブラブラと歩き、土産を少し買った。そして再び、福田さんと共に日本人グループを迎えに、夕刻、メリゾへ向かい、６時頃、福田さんの家に何事もなく着いた。
　ところがこの時、福田さんは今日、パラオ島から島のチーフが来ることを思い出したのだ。

　急遽、皆で空港へ向かったが、むなしく人影はいなかった。彼は少しも愚痴ることなく、ホテルへ車を向けるのだった。案の定、そこにはパラオのチーフはいたのだ。
　優しそうなおじいさんで、パラオ語と日本語しか喋れなくて、福田さんとはなんと、ひどいなまりで外国人同士が、日本語で喋っている光景は少々、滑稽でもあり優越感が首をもたげた。

　さてその夜９時頃、福田さんの奥さんの妹という人が友達を連れてきて、福田さんの家にいた我々日本人を食事に連れて行くという。例のワーゲンのバンに詰め込まれて、中華料理屋へ行く。
　ご馳走してくれるのだろうか？ついでにホテルで知り合った別の日本人を引っ張ってきたのはいいものの、食べ終わった後で割り勘になって、高い予定にない出費になったのだった。
　彼にはすまないことをした。『何でこんな高いところへ連れてきたんだ』と言っても始まらない。時は１０時半、福田さんの家に戻った。

　パイナップルが山盛り出された。トラック島でパインを食べ過ぎ下痢したことを思いだし、二切れでやめておいた。

　テレビでアメリカでも人気番組らしい、〔デビット．ジャンセンの逃亡者〕をやっていて、福田さんはじっと見ていたが、僕にはチンプンカンプンで、その娘達に日本語を教えて時間をつぶす。
　とても熱心で、教えがいがある。ＧＵＹ（ガイ）を色男と教えた日本人もいた。

　逆に英語を教えてくれると言ってくれたけれど、それは無理というものだ。日本語を知らないのに！

　逃亡者も終わり、ホテルへ行くことになったが、僕は明日の朝早く出発ということで、福田さんの家のソファ椅子の上に寝させて貰うことにした。
　寝苦しい！隣のソファで寝ている福田さんの下で働いている男が、時おり英語で寝言を言う。面白い！
　彼にも悩みはあるのだろうか？表面のんきな島に見えるが、結構、問題はあるかもしれない？

第十三章　　日本へ

　出発の８月１８日の朝、午前４時にホテルに行くことになっていたが、４時１０分頃、電話が鳴った。寝過ごしたのだ。
　すぐに飛び起きた。福田さんも飛び起きてきた。これで電話のベルが鳴らなかったら、日本に帰れなかったかもしれない。
　急ぎ、車をスタートさせて、直ちにホテルでみんなを拾い、トンボ帰りに空港へ向かった。

　４時５０分到着した。すぐ手続きを済ませて、買い物をしようと表に出た。するとなんと、バービーキューインの有井さんが来ているではないか。彼には会いにくい。何故かというと、日本に帰るというのに別れの挨拶もしていないのだ。時間がなかったのである。言い訳にはならないだろう。

　「ヒラノ！」と、呼ばれて、全く照れて頭を下げた。
　「日本から手紙を出すつもりだった」と言って、逃げるように免税ショップに入った。飛行機の中で食べようと、チョコレートを買った。ついでだからと、タバコを一ケース買った。
　『羽田で、引っかかるかもしれないが、土産で通してくれないだろうか？』

　５時４０分、パンアメリカンのジェット機に乗り込む。麗しきグアムよさらばだ！また来る日まで。
　『お世話になった福田さん、有井さんさようなら！手紙はすぐ出します。日本に来たら寄って下さい』

　タラップの上から、皆に最後の手を振り、グアムの空気から遮断された。
　不思議と、この金属の物体に収まると、皆との別れの名残りが消える。すぐ日本のことが目の前に浮かび出した。『みんなどうしているかな？グアムからポナペに行く時、別れた友達にも帰ったらすぐ手紙を書こう』

　機内は空いていた。５時５５分機体は点を離れた。ジェットエンジンがうなり出し、グアムの台地は僕の足を離れ、音と共に下に後ろに、遠ざかってゆく。
　独立３次元の世界は３時間後には、我々を日本の羽田に持っていってくれるだろう。

　飛び上がって２時間、機体は悪気流でガタガタと揺れている。決していい気分ではなかった。こわれて墜落しそうな気もある。
　それよりも今は、腹が減って朝食が待ち遠しい。揺れが激しいので出ないのだろう。

　しばらくすると、待ちに待った食事が出てきた。まもなく、東京に着く頃である。あのガタゴトが朝のいい運動になり、食欲は充分で、素早く食べることができた。とてもうまかった。久し

ぶりの正常な食事だった。

　あっという間に、スモッグに本当にまみれている日本の台地が、ジェット機の高度を下げると共に見えてきた。軽く数回、旋回。地上がよく見える。船が、港が、緑が、日本だ！僕の生まれ故郷だ。なつかしい、早く着陸して欲しい！
　グーッと高度を下げる。煙突が立ち並ぶ間をぬって、滑走路が走る。ショックが帰国だ！ツツツー、２００メートルばかりで、猛烈なジェットエンジンの逆噴射、ブレーキだ。羽田の滑走路は短い。ゆっくりと地上を走り、到着ゲートに向かう。やがて停止、ドアが開かれ感慨ひとしお。

　日本の空気、僕は日本人。数人の日本人と、手続き場へ進んだ。ごく軽く通過した。税関はトランクの中に、いっぱい詰まっている例の洗濯物を見ただけで、ＯＫのステッカーを貼った。
　しかし、タバコはやはり未成年者のため取られた。『いいや、あんなもん』覚悟はしていた。

　後ろを見ると、女の人は実に丁寧に、調べられていたのだ。次は現在の処、日本のお金は２００円しか持っていないので、これではモノレールの浜松町までしか行けない。
　１１４ドル余りを日本円にすぐに、空港内の銀行出張所で換えなければならなかった。

　なんと１ドルの売りが３５９円である。ドルを買う時は３６５円、売りは３５９円、グアムでは３７８円、ポナペでは３９８円と、たいそう開きがあるではないか！
　ポナペで売れば儲かった。まあ余裕はなかったし、暇もなかった。

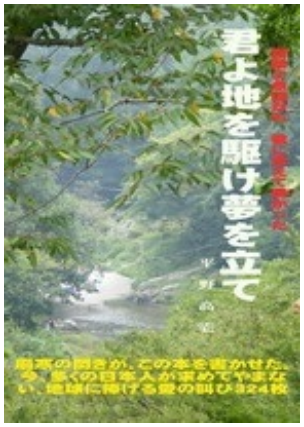
　４万円余りの日本円を手にして、同行の日本人達と別れ、モノレールの一番前の席に座る。初めてだった。日本を出発する時は友人がタクシーで羽田まで送ってくれた。
　風を切る。日本の景色が目にしみる。国電に乗り込んだが、周りとの違和感は否定できない。通勤時間帯は過ぎており空いていた。皆、異様に思ったに違いない。顔は真っ黒、地味なシャツと、馬鹿でかいボストンバック。
　一駅手前の、中央線の高円寺駅で降りた。タクシーに乗り、日本の運転手の運転のうまさに改めて感動するのだった。

　僕の家だ！到着。誰かいるか？最初の一声が、
　「帰ってきちゃった！」とは、子供くささで照れたのだ。完

あと書き

　この本は１９６７年に自分で、ガリ版を刷り７０冊作りました。出版社に送り、見て貰い小学館から了解を戴きましたが、私の環境事情で正式出版には至りませんでした。いずれ皆様に読みやすい形で公開したいといつも思っていました。作成した当時の本は友人知り合いに渡して皆無です。残っているのは結婚前に渡して、妻となった女房から返された一冊だけです。ネットで公開はしていますが、今回少し手を入れ、もっと見やすくしてあります。見て頂きありがとうございました。筆者　次回作乞うご期待！

「君よ地を駆け夢を立て」書き下ろし新作公開しました。H22.12.27



“光子音源”公開しました。平成２３年２月２２日・長編５５０枚。